

生田直親

書下し長篇。パニック・ノベル

●北海道占領さる

ソ連侵略
198X年
上

TOKUMA NOVEL



TOKUMA NOVELS

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

生田直親

ソ連侵略
198X
(上)

Naachika Ikuta ©1980

カバー絵／谷口 茂

デザイン／矢島高光

落丁・乱丁はおとりかえいたします

〈編集担当 本間 肇〉

82J30f

書下し長篇。パニック・ノベル

ソ連侵略198X年(上)

●北海道占領さる

生田直親



徳間書店

TOKUMA NOVELS

目次

INTRODUCTION

7

ACT I

34

ACT II

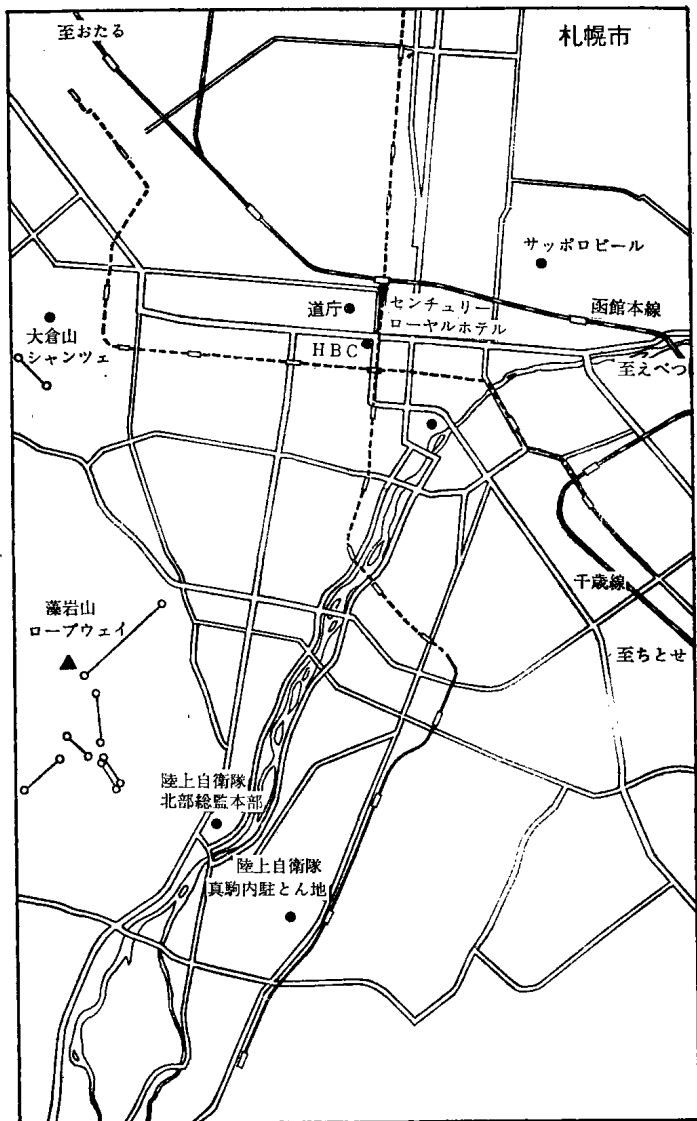
81

ACT III

111

COMBAT I

142



INTRODUCTION

198X年8月13日 PM0時30分

札幌市北4西6 北四条ビルF喫茶店

喫茶店の中は、昼休みのサラリーマンの談笑で賑わっていた。この界限は北海道庁を中心に、M新聞社、M生命、N証券、D生命、札幌郵政局等が連なる、札幌の主要官庁、一流会社の集めくところだけに、空席もない混雑ぶりだった。

札幌の夏は涼しい、と言っても真昼の直射日光の下はやはりこたえる。それぞれの職場は最近の石油事情の逼迫から節電を迫られ、冷房を極端に節約しているところが多い。食事を済ませたサラリーマンたちが、逃げこんでほんとネクタイをゆるめることができるのは喫茶店ぐらいしかなかった。

職場の話、競馬の話、飲み屋の話に、OLたちの男性の品定め、饒舌と笑声が湧き、紫煙が立ちこめる中

で、一番奥まったテーブル席だけが信じられないように静まりかえっている。そこには三人の男と一人の女がテーブルを囲んでいて、四人ともモノも言わず煙草ばかりくゆらせていた。

男の一人は中肉中背、白のワークシャツに皮チョッキというラフな恰好で、パイプを咥え、時折チョッキのポケットから時代ものの懐中時計をとりだすと、パチンと蓋をひらいて時間をたしかめている。童顔で一見若そうに見えるが、三十四、五歳だろうか、四人の中で一番の年配のように見えた。

その隣りで長い足を組んで天井を睨んでいる紺のTシャツの若者は、ひどく顎が長いのと、鼻下にたくわえた不似合いな髭とが特徴だった。さながら髭を生やした馬という印象の学生っぽい青年だった。

パイプ氏と対面する位置にいる女は1メートル70をゆうに上まわるグラマーな姿態を、赤いノースリーブとホットパンツといういでたちで誇っていた。やはり大学生のような感じだが、オカッパに切り揃えた髪に、濃い目の化粧がアンバランスに映る。

パイプ氏の右隣りにいる男は、若いのか老けているのか不可解な存在だった。人生に疲れたようなしよ

たれた顔に、強度の近視の眼鏡をかけ、舐めるようにして備えつけのマンガ本を読んでいる。ぼさぼさに伸ばした髪を皮のバンダーナで縛り、オートバイ用の黒の皮ジャンを暑苦しく着こんでいたが、その肩から背中にかけて、胡椒をふり撒いたようにフケを散らしている。

彼らのような風采の者たちが、昼休みのオフィス街にいて、自分が場ちがいであり、喧噪の中で沈黙を守っていることが、なお馴染まない存在にしていた。だが、彼らの沈黙は、ネクタイ族のあいだにまぎれこんだため、圧倒されて小さくなっているという様子ではなかった。

四人が四人とも、心の中に抱きかかえているものが重すぎて、その重たいものがハジけ飛ぶ時間が刻一刻と接近する恐怖を必死にねじ伏せている様子があつた。パイプ氏は、せわしなく紫煙を吐きだしていたし、ヒゲ馬は極度の緊張で、深呼吸と生欠伸をくり返している。オカッパは鼻の頭に汗をにじませているのに拭くのを忘れ、バンダーナはマンガ本の内容が眼に入らないらしく、おなじところを何度も読み返している。

四人は、正午をすぎた頃から一人、また一人とこの

店に現われ、四人揃ったところでハンバーガーを注文した。一皿二個の大きなパンを、彼らはケチャップで頬を血のように染めながら黙々と頬張り、コップの水で流しこむという作業をつづけた結果、言いあわせたように一個ずつ残してしまったのも、緊張で胃がちぢみあがつているからとしか思えなかった。

あとは、お替りを頼んでは水ばかり飲んでゐる。それでも口腔の渴きはいやされないようだった。

やがて、ヒゲ馬とバンダーナが連れだって手洗いに立った。二人が帰ってくるのを待ちかねたようにパイプ氏とオカッパも用を足しに行った。先に席に戻ったのがオカッパのほうで、5分遅れてパイプ氏がハンケチで手を拭きながら帰ってきた。出すものをすっかり出してきたという表情だった。

パイプ氏がふたたび懐中時計をとりだして、蓋をひらいた。0時30分ちょうどである。四人の眼がそれを確認した。蓋が、音たてて閉じられる。

四人がそれぞれ小銭をだして、ワリカンの代金をテーブルの上におく。年長格のパイプ氏がそれをひとまとめにして伝票と共に、レジへ持ってゆく。追いかける形でヒゲ馬とオカッパがそれにつづく。最後にバン

ダーナが頭を掻きながら腰をあげ、テーブルの上にはおびたらしいフケが置き土産になっていた。

喫茶店を出た彼らは、舗道に横一列に並んで、眼をしばたきながら空を仰いだ。北国の、透明で高い空が、あふれるほどの青さに輝いている。きれぎれの白い雲が、形を変えながら一方へ運ばれてゆくのは、高層の風の速さを物語るのだろう。それは彼らの心の動揺を示すかのようだった。四人は、ゆっくりと視線を水平におろしていった。

車の錯綜する北四条通りをへだてて、立体長方形で12階建ての、北海道庁の建物がガラス窓に燦然と陽光を反射させて聳え立っていた。傲然とした感じに見えた。眼をやや左に移すと、道庁や道警本部のあるブロックの向こう側に、HBC放送の6階建てのビルがこぢんまりと見てとれる。

四人は道庁とHBCの建物を交互に見つめ、網膜に灼きつけたのち、互いに顔を見あわせて、深く、頷きあった。それぞれの内部の恐れやら昂ぶりをねじ伏せて、〈ゆくぞ〉と無言で言い交したのである。

その場にバンダーナだけを残し、パイプ氏、ヒゲ馬、オカッパの三人は、横断歩道の信号が青になったのを

見定めて車道をよぎり、広々とした道庁前の庭園に足を踏み入れてゆく。その足どりは、それまでの緊張とは逆に、夏休みに海を渡って北海道見物にやってくるおびたらしい蟹族のようにのんびりしたものだった。

喫茶店の前でこれを見送ったバンダーナは、やおら傍らの自治会館前の駐車場へと歩を運び、そこにおいてある愛用の125CCのバイクにまたがり、ペダルを蹴って始動させると、駐車場の中を一巡してからビルの物陰に入ってブレーキをかけた。スタンドを立てて車をおりると、荷台にくくりつけた大きな風呂敷包みをおろして路上におく。風呂敷をほどくと古びた岡持ちと、調理人用の割烹着があらわれた。

バンダーナは急いでこの割烹着を皮ジャンの上に着こみ、前かけをかけ、岡持ちを左手にぶら下げた。

〈来來軒〉と大きく書かれた岡持ちを持った姿は、どう見ても近所の中華料理店の出前持ちである。

彼はその恰好でバイクにまたがり、スタンドを蹴りあげ、右手でアクセルをあおって発進させた。北四条通りから道庁北門に入り、芝生の間の車道を一気に飛ばす。2階建て赤レンガの旧庁舎前をぬけ、さらに右に曲って道警本部前を疾走し、新庁舎の南職員通用口

の前でタイヤをきしませて急停車した。

バンダーナはバイクからおりて、大きく深呼吸する。ついで、出任せのメロディーを口笛で吹きながら、通用口の階段を弾みをつけて駆けあがり、とっつきの守衛室のガラス窓の前を、

「お待っとおさん！」

と岡持ちをかざして走りぬけ、そのままの勢いで庁内の南階段を二段とびに駆けあがっていった。

一方、パイプ氏たち三人は、道庁東正面入口を入ろうとして、そこに睥睨する数人の守衛の一人に呼びとめられていた。守衛はオカッパが肩からぶらさげているキャンパス地の、大きなズダ袋のようなバッグに眼をとめたのである。

「おそれ入りますが、そのバッグの中を拝見させてもらいます」

「バッグの？」

とオカッパが眉をひそめた。「道庁に入るのに、そない検査を受けなあかんの？」

「規則ですのぞ」

守衛は壁に掲示された注意書きを、顎をしゃくって示した。そこにはへおことわりと記して、

へ時節柄、不審な荷物を所持された方には、点検をお願いする場合があります。なにとぞ協力ください」と書かれていた。

「オサエのバッグが不審な荷物か」

パイプ氏が笑って、「おまえって存在自体が不審物だからな。見せてやれよ」

オカッパはむっとした表情で、バッグの蓋を開き、守衛の眼の前に突きつけた。

「ほら、化粧品にティッシュペーパー、すってんてんの財布。ガーゼのハンカチにパンティの替えが一枚、アンド、コンドーサンが一ダース……文句ある？」

「失礼しました」

と一礼して守衛はなお食いさがる。「みなさんはどちらをお訪ねですか」

本州からの旅行者が、道庁にどんな用があるのかと言いたげだった。

「あのねえ」

長身のヒゲ馬が、上から守衛の顔を覗くようにして、中っ腹な声をだした。「おれの二番目の兄貴が農政課のペエペエなの。そいでこの人がこの人の妹さんで……」

とオカッパとパイプ氏を順に指差して、

「兄貴の嫁さんにどうかなんて外野がうるさいしさ。

屋上の塔内に喫茶ルームがあるだろ？ あすこでお茶でも飲みながら、なにげないお見合つてのをやらかしたいのヨ。わかる？」

「諒解しました。農政課は5階です、どうぞ」

守衛の敬礼にヒゲ馬も敬礼で挨拶を返し、三人はガラスドアを排してロビーに入った。冷房のひんやりした感触に包まれて、誰もがほっと小さな吐息を洩らしながら、フロアの中央に4基ずつ対面するエレベーターのほうへ、はやる心を抑えつけてゆっくり歩いていた。

同時刻 北2西6 HBC放送局

道庁から目と鼻の先の、北二条通りに面した北海道HBC放送局の正面玄関にいま、二人の男がドアを入ろうとしていた。

一人は、うわぜいもあるが、かなりに腹のぞいた四十一年配の人物で、体の重みで足どりまで大儀そうだった。顔立ちは平凡だがロイド眼鏡が特徴で、アロハシャツ

の上に白いスーツをだらしく着こみ、アタッシェケースを一つぶらさげている。

もう一人の二十七、八の若者のほうは、髪も短かく刈り揃え、洗いたてのYシャツにきちんとネクタイを締め、紺の上下もパリッとしていたし、靴も磨きたてのように光っていて、銀行員か公務員のような実直さがかがえた。

ガラスドアを入ると、すぐ左側が受付で、愛嬌のある小太りの受付嬢がにこやかに二人を迎えた。

「守分専務におとりつぎ願いたいんですが」
中年太りのほうが、首筋の汗を拭きながら丁寧に言った。

「お約束でございましょうか」

「北海中央新聞の杉本記者を通じて面会をお願いした者で、神尾と申します」

「少々お待ちください」

そう言って受付嬢は局内電話のダイヤルを回して、誰かと二言三言話をしたあげく、

「生憎、守分は昼食にでておりますが、間もなく帰ってくるそうですので、ロビーで少々お待ちしていただきたいとのことですが」

「結構です、そうさせていただきますしょう」

「では、これにお名前を……」

差し込まれた訪問者名簿に、中年太りのほうは神尾久三、随筆業と記し、若いほうは土倉道夫、北海道電通勤務と書きこんだ。

二人はロビイのソファに並んで腰をおろし、受付嬢の品定めでもやっているような表情で低い声を交していた。

「神尾さん、12時45分まで、あと10分ちょっとですよ」

「わかつている。もう5分して守分専務が帰ってこなかったら、誰でもいい、お偉方と交渉させろと談判する」

「白い蠟の連中、うまく乗っ取りますかね」

「下見も、練習も充分くり返したあげくだ、ぜったい巧くゆくさ」

神尾と呼ばれた男は、自信ありげに言い切ったが、刻々と迫る「或る決行」の重圧からは逃れられないように、膝においた手の人差し指でひっきりなしに膝小僧を叩きつづけている。

土倉という名を記帳した若者も、自分を落ち着かそうと煙草を啜えたが、マッチをする手がちいさく慄え

て、二度、三度、火をつけ損い、そういう自分と舌うちをして、啜っていた煙草を灰皿の上で押しつぶしてしまった。

5分という時間があつてなく経過した。

神尾はまたハンケチで顔をぬぐって、大儀そうに腰をあげ、土倉ははじかれたように立ちあがった。二人はまっすぐ歩きだして、再度受付嬢の前に立つ。

「おそれ入りますか」

神尾は、やわらかい語調で頼んだ。「まだ守分専務はお戻りじゃないと思いますが、でしたら誰方でも結構です。局を代表する方にお目にかかりたいんですが」

「生憎、社長は入院中で休んでおりまして、副社長は東京へ出張中でございますが」

受付嬢の返事に神尾は頷いてみせて、

「存じています。ですから編成局長とか、制作局長の方にご都合を聞いていただけませんか」

「編成局長は守分専務とご一緒に昼食をとりにお出かけになりましたし」

と受付嬢はタイムテーブルの上に指を動かして、「制作局長は11時からずっと会議中でございます」

「じゃあ会議中の制作局長を呼びだしていただけないか」

「会議中はお取り次ぎできないことになっているんです」

「しかし、緊急の場合は別でしょう？」

「そんなにお急ぎなんですか？」

「緊急、かつ重大です」

神尾は語調を急に変え、鋭く言った。「ただちに取り次いでください」

気圧されて受付嬢は、あわてて局内電話のダイヤルを回し、吉野制作局長に緊急の用事だと伝えた。そして、委細は当人の口から頼むと言いたげに、受話器を神尾に手渡した。

「もしもし、吉野ですが」

と、やがて錆びた声が流れてきた。

「制作局長ですか？」

「そうです」

「わたくし神尾と申します。実は、お目にかかって、ぜひお願いしたいことがございまして」

「どういうご用件でしょう？」

「電話では申しあげられませんが、ご承知いただけないと人命にかかわる重大な問題なのです」

「人命にかかわる？」

電話の向こうで、ちよつと考えこむ気配が感じられた。「もしもし、失礼ですがあなたは警察関係の……」

「いや、一市民です。しかしこの情報はぜったいの事実ですし、あなたはいやがおうでもわれわれに会う義務があります」

「ぜったいの事実で、会う義務ですか」

言葉を反芻して再度考えこむ間合いがあった。「よろしい、会議中ですので、15分だけというお約束でお会いしましょう。電話を受付の者にお渡しください」
神尾は受話器を受付嬢に返した。彼女はそれを耳にして上司の意向をたしかめたのち、

「どうぞ、左手奥の第一応接室にお通り下さい。吉野がすぐまいるそうでございますから」

「ありがとうございます」

神尾は礼を言つて、土倉をうながして歩きかけた。土倉は極度の緊張で電話のやりとりを聞いていたらしい。歩きだそうとして、思わず足をもつれさせた。危うくそれを、神尾が抱き支えた。

「だいじょうぶです」

と土倉は硬^こわばった微笑を作ってから、神尾とともに廊下を歩きます。受付嬢が奇異の眼をこらしてこれを見送っていた。

同時刻 大通り公園

市営地下鉄をへ大通りへでおりた比企文世は、白いフレーヤースカートを翻えして階段を駆け上がり、日射しのまぶしい大通り公園にでた。

公園の芝生のあちこちには、昼休みを憩うサラリーマンが顔にハンケチをかけて眠っていたり、腰をおろしたOLたちが談笑したりしている。子連れで買物にきた主婦が、子どもを遊ばせながら、足を休めている姿も少なくなかった。

よちよち歩きの子どもが、芝生の上を危なっかしい恰好で歩く姿は、見る者の微笑を誘う。子どもは、屋台の焼とうもろこし屋の周辺を歩きまわっている鳩を手でとらえようとし、鳩はつかまるまいと逃げまわり、ときに羽音をとどろかせて一斉に空に舞いあがる。驚いて子どもは、わっと泣きだした。

文世は、これらの平和な光景の中を、噴水の水が霧

となって飛んでくるのを浴びながら、颯爽とテレビ塔の方へ歩いていった。

心が躍っていた。

彼女は東京のS女子大の二年生である。自宅は世田谷だったが、去年の春、父親が札幌に転勤となり、母を連れて赴任したので、以来彼女は寮生活をしている。そして夏休み、冬休みともなると、すぐ札幌へとんできて真駒内^{マコウチ}の官舎で久しぶりの父母との生活を樂しむのだった。

一人娘だけに、世間知らずの甘えん坊だった。東京で父母と暮していたときも、盛り場を買物にでかけるのにも母か友人と一緒に、一人歩きなどほとんどしたことがない。S女子大はお嬢さま学校と蔑称されているぐらいだから、文世のような育てられ方をした者が多く、寮生活も単調なおしとやかさが守られて、滅多に一人だけの外出などしなかった。

それなのに、この夏休みに札幌にきた文世は、きょうで既に三度目の単身外出を重ねている。理由は単純で、一人の男性と識りあったからである。

夏休みに入っすぐの七月末の或る晩、文世は最終便の飛行機で千歳空港に着いたのだった。二人の男に

絡まれたのは、手荷物引渡所でスーツケースを受けとってロビーに出たところだった。

「お嬢さん、札幌かい？」

三十年配の色の黒い、アロハシャツの男が声かけてきた。「雨でタクシー乗場は行列だよ。安くしとくから乗ってかねえかい」

どうやら白タクらしかった。

「バスは混むぜ」

もう一人は二十一、二の瘦せて色白で、顔中にニキビがいっぱい吹きだしている若者だった。「おれたち二人で組んでやってるんだけどさ。市内だったら四千円にしとくよ」

「いや、お嬢さんだったら三千円でいい」

二人の男は、ふり切るように歩きだした文世の左右にびったり貼りついて、ねばっこく食い下る。

「結構です」

文世は怖かった。「並んでタクシーに乗りますから」彼女が嘘をつけなかった。迎えがきているとか何とか言って、この手の者をふり切るすべを知らなかった。

「そりゃないよ」

ニキビは猫撫で声で、「おれたちこう見えたってA

級ライセンスを持ってるんだぜ。信じてくれよ」

「さあきまった、きまった」

色黒は、労働者らしい膂力^{りよくちから}で、いきなり文世のスーツケースをもぎとって、「さあ、こっちだ、こっち」と、さっさと一方へ歩きます。

「待って」

いきおい、文世は追いかける破目となった。駆け寄ってスーツケースを奪い返そうとする。

「返して……返して頂戴……！」

奪い返そうにも男の力は頑丈で、彼女はスーツケースの一端を握ったまま、ずるずるとひきずられてゆく恰好だった。

「いいじゃないのさ、この際、おれたちを信用してさ。乗ッテケ乗ッテケってもんだ」

ニキビが尻ぐみの恰好の文世の背中を押すようにして、事のついでにヒップの触感を楽しんでいた。そんなもつれあった形のまま到着口ロビーからひきずりだされてしまったのである。

「おい、おまえ車を回してこい」

色黒がニキビにそう言って、ニキビは雨の中にとびだしかけたときだった。